

### \* 30cm クック写真天図写真儀の対物レンズ発見

東京天文台90年史には主要設備として赤道儀関係として次の5点が載っている。

- 1) ツアイス大写真赤道儀 (口径65cm、焦点距離1,021cm) (口径38cm、焦点距離1,083cm、実視望遠鏡同架) (1929年)
- 2) クック写真天図写真儀 (口径30cm、焦点距離351cm) 1934年、1966年架台更新)
- 3) 日本光学反射望遠鏡 (口径30cm、合成焦点距離500cm) (1950年)
- 4) ツアイス赤道儀 (口径20cm、焦点距離359cm) (1927年)
- 5) 自動流星写真儀 (口径5cm、焦点距離20cm、四連儀) (1962年)

この度、ひょんなことから自動光電子午環棟に収蔵していた正体不明の筒(写真1)が2)のクック写真天図写真儀の対物レンズであることが判明した。



写真1 正体の分からなかった鏡筒

天文学史研究家の佐藤利男氏が、アーカイブ室を訪れた際、現在は国立科学博物館に展示されている初期の東京天文台の主力望遠鏡であった20cmトロートン望遠鏡に同架された天体写真儀をどこかで見たような気がするということのである。たぶん筆者が進めている自動光電子午環望遠鏡フロアの展示室だったように思うということなので、探索に出かけた。佐藤氏

のいう天体写真儀は見つからなかったのだが、ずっと正体不明と思っていた古ぼけた直径30cmあまり、高さ1mあまりの筒先の蓋を外し、レンズの縁をみるとなにやら刻印されており、佐藤氏が「COOKE」という字を見つけた。そこで「魔法の指」といわれることもある筆者の指でその辺りを擦ってみると、なんと「COOKE TROUGHTON & SIMMS LTD. KONDON & YORK」(写真2)という文字が浮き上がってきた。



写真2 COOKE TROUGHTON & SIMMS LTD. KONDON & YORKの刻印

2人は同時に「おおー！」という驚きの声を上げた。なんと正体不明の筒としてぞんざいに扱ってきた薄汚れた埃まみれのものは、なんと歴史的な貴重な望遠鏡の一部であった。その刻印の反対側には「ASTRO-PHOTO. OBJECTIVE. No. 2533 APERTURE 30.48CMS. FOCAL LENGTH 351CMS.」(写真3)とある。東京天文台90年史の記述とぴったりである。



写真3 ASTRO-PHOTO. OBJECTIVE. No. 2533 APERTURE 30.48CMS. FOCAL LENGTH 351CMS. の刻印

口径は30.48cmとある。これはまさしく12吋である。1インチ2.54cm×12=30.48cm。この鏡筒は、2000年、大赤道儀室(65cm赤道儀望遠鏡ドーム)が国立天文台歴史館に改装される際、ドームの床下にあったものを天文情報センターのプレハブ倉庫に運んだものと思われる。65cm赤道儀望遠鏡ドーム床下には貴重な歴史的遺産が大量にあったはずだが、その多くの行方は知れない。残念ながら筆者はその当時、「すばる」建設のためハワイに滞在していたので、ドーム床下の整理、片付けに立合えなかったのを今は悔やむのである。それでも、このようになにかの縁でその存在を知ることがある。歴史的に貴重なもので、筆

者が現在一番気にかけているものは、現在、すばる解析研究棟が建っているところにあった  
連合子午儀室3号室にあった「天頂儀」の行方である。心当たりのある方はぜひ情報をお  
寄せいただきたい。

発見されたクック写真天図写真儀の対物レンズの様子は写真4のようである。



写真4 口径30.48cm 焦点距離351cmのレンズ